

## 胴桶のある風景

この写真は春先の福島県の畑の風景である。

昔は、人糞は農家にとつては、頗る大切な肥料であった。

従つて田んぼを除き畑の道はこのような道であった。

胴桶を「どうき」又は「どうけ」と呼んで、人糞を溜めて置くのが大切な冬場の仕事であつたし、どうけの中に雪や、雨が入らないように、藁で作つた、このような囲いがしてあるのが普通であつた。

昔の福島県の懐かしい「田園風景」は、この肥え壺がなければ、様にならない。

昭和九年に、小松市の水道を現在の町道を通じて、大田山から送るパイプ敷設工事が行われ、一間半の道幅が、現在の広さになるまでには、県道筋でも「どうけ」が道路に沿つて、所々に見られた記憶が鮮明である。

当時は、砂利道を馬車が通り、時には馬車馬が、道の真ん中に、悠々と小便していたから、道路に沿つて「どうけ」があつても、そうたいして苦にもならなかつた時代である。

水道敷設工事と共に、側溝も出来始めた時代でもあつた。

この「どうけ」は、福井の釈谷石で作つてあるのが通常であつたが、この「どうけ」をどうして運んできたのか、を調べたことがある。

交通の便利でない、時代には船で、安宅の湊にはいり、支流を遡つて運搬したと言う。

大きな胴に縄をぐるぐる巻きにして、大玉ころがしをするように、所用の場所まで運んだと言う。

昔は、現在では想像できないほど、根上村の水路は発達していたようだ。

根上りの神社の鳥居も、神社のねきまで船で運び、根上り山まで、皆で被いて上がったし、中の庄の『折橋川』の橋が、石の橋であつた理由も、小松城に納入する、年貢米の集散の大切な出荷の場所であつたのを見ても分る。

